

## 1971年のジョン・B・キーン作品の女性たち

児嶋 一男

1969年1月20日に Cork の The Cork Opera House で初演の John B. Keane (1928-2002) の *Big Maggie* は、前世代では当然と思われていた女性の生き方に反する女性マギーを通して、伝統的な女性観——妻は夫に従い、母親となって子を育て、主婦として家を守る者——に疑問を呈する舞台であった<sup>1)</sup>。

女性は夫に忍従の妻であり、子育て最優先の母であるべきという観念は、既成のアイランド社会において長く正しいとされてきた慣習が固定化され、権威化されたものであった。

権威は時として愚行を生み、それが愚考であるか否かを勘案する機会がなければ、さらに悪しく固定化されていく。

本稿は、1971年に上演されたキーン（42歳）の戯曲2作品を、この視点から読み解くものである。

### *The Change in Mame Fadden*

1971年5月10日、コークの〈オペラ・ハウス〉劇場で初演。

1幕1場。40代半ばの主婦メイム・ファドゥンが川沿いの地をぶらついている。メイムが子供の頃から親しくしている Sammy (78歳) が声をかける。サミーは、夕刻に女性が一人では好ましくない地域だからと、メイムに帰宅するよう諭す。

2場。1週間後、ファドゥン家の居間。一家の友人にしてメイムの保護者を自認するサミーは、メイムの夫 Edward、長男 Jack と二男 Jim に、メイムの川岸での様子を伝え、彼女に優しく接するようにと願う。

3場。1時間後、帰宅したメイムをエドワードが問い詰める。メイムは夜

ごと出かけるのは、残された人生をこの家に閉じ込められたまま過ごすという恐怖に耐えられないからだと訴える。

4場。深夜0時過ぎ。川沿い。縄張りを侵されたと誤解した娼婦が、メイムに殴りかかる。メイムは、通りかかった三人組の男に介抱される。

2幕1場。30分後、ファドゥン家の居間。訪ねて来た司祭 Doole は、些末な夫婦喧嘩と思ひ、関係修復のために夫婦で旅行に行くことを勧める。夫妻は同意するが、エドワードがメイムの顔の傷について詰問し、メイムが娼婦らと関わっていると邪推したことから、再び不和となる。

2場。数日後。居間で、エドワードとジャック夫妻とジムが、メイムの心身の健康について話し合い、メイムを施設で療養させると決める。メイムがこれを拒否すると、エドワードは名士のみを会員とするゴルフクラブに、メイムの不行状のせいで入会できなくなったと、メイムを責める。

3場。同夜、川沿いを彷徨するメイムに、三人組の男たちの一人 Moore が唐突に求婚する。メイムはそれを断り、川縁へと降りていく。

サミーがメイムを探しに来る。しかし、女性の悲鳴が聞こえたと言っているものの、メイムの入水とは想わず、出会わせた娼婦に手を引かれて去っていく。

メイムはサミーに、“... everything seems to be breaking up, I'm tired of it all.” (83) と打ち明ける。夫エドワードは校長に昇任以来、名門ゴルフクラブの会員になることしか頭になく自分につれない。息子二人は独立して家を出ており、息子の嫁たちには見下され、疎んじられている。“I spend the nights crying myself to sleep. I'm so lonely, Sammy. I've no one.” (85) と嘆くメイムの不満は、誰にも相手にされず、自分は孤独だと思い込んでいる主婦の愚痴と、物語の冒頭(1幕1場)では印象づけられる。

メイムと川沿いの地で会った3人組の男らも、家庭内の孤独について語る(1幕4場)。下級官吏の Pat は抵抗の印に自殺を考えるほどに、女房に愛想尽かしされている。Mick もまた何度か自殺を考えるほどに、妻の浮気に傷つきつつそれを黙認し続けている。妻を亡くしたムーアは幼い一人娘を姉に預けて、淋しく一人暮らしをしている。3人のこうした家庭における孤独は、おかれた環境下での傷心に由来する。

メイムの孤独もまた家庭内での疎外感にあることは確かだが、その根は深い。

1971年のジョン・B・キーン作品の女性たち

夫と息子たちはサミーからメイムの夜ごとの徘徊を聞いて、そこがいかがわしいとされる地域であることから、自分たちの世間体を憂慮する。しかし、メイムの心情を慮ることはない。

メイムが興奮して2階から目覚まし時計を放り捨て、卑猥な罵り言葉を喚いたという一件でも、彼らはそれをメイムの奇行と決めつけ、近所の外聞が悪いことを気にかけ、迷惑がる。

**Jack** She's not really to be blamed. Her life is changing. ... It's a difficult time.

**Edward** As far as I can see this change of life business is the greatest excuse for misbehaviour and self-indulgence I ever heard of. There are some women who really take advantage of it and your mother is one of them. (90)

ジャックは、「母さんを責めちゃいけない。人生の変わり目……変調の時期だから」とメイムに理解を示す。しかし、それはメイムの疎外感の本質に至るものではない。母メイムへのジャックの同情は、相応の年齢の女性に起こる身体的現象という固定観念に基づいている。メイムの“this change of life business”は、文字通り「人生における変化」を示すと同時に、女性の更年期を表してもいるのだが、父子3人は、女性の更年期はメイムに限ったことではなく、本人も家族も耐えて待っていれば、その「難しい時期」は過ぎ去って落ち着くと思っている。

彼らにとって気がかりなのは、メイムの「変調」によって自分たちの社会的な立場に害が及ぼされないかということだけであり、メイムを案じる気持ちは全くない。

メイムを実の娘のように思ってきたサミーもまた、自身の亡き妻が同様であったという記憶に基づいて、“She's in a troubled time of her life.” (96) と理解している。

このように男たちは一様に、メイムの「変調」の原因は、彼女が更年期にあるゆえと決めつけている。

女性についての固定観念ということに関しては、Father McNamara がメイムを称えた“a model housewife” (120) の定義にも見られる。

Submit to one another out of reverence for Christ. Wives, submit to your

husbands as to the Lord. For the husband is the head of the wife as Christ is the head of the church, his body, of which he is the Savior. Now as the church submits to Christ, so also wives should submit to their husbands in everything.

(*Ephesians* Chapter 5:21-24)

メイムは夫・教会・キリスト・神に「従属する」ものとして、マクナマラ司祭の言う「エペソ人への手紙」にもある“ideal woman” (120)であった。メイム自身もまた、従順な妻であり、家族と家庭を守ることに忠実な主婦・母親という女性の役割を果たしてきたと自負していた。ところがメイムは、その役割を失ったと思い、自身が生きている拠り所がなくなったと感じ始める。

メイムは“feel independent” (108) と思える自らの拠り所を探り、それを模索する過程において、まず経済的な「自立」を考える。そこで、自身の判断が及ぶ金を持つことを夫エドワードに頼む。エドワードは、費やす理由のある金に不自由させたことはないと応じるが、“nearly always short of money” (105) と訴えるメイムの真意は理解できない。エドワードはメイムに“I am hereby forbidding you to go out at night for your own good.” (110) と命じ、メイムは“I am cooped up.” (109) と怯えることになる。

**Mame** (Frustrated) What would a sane woman want, Edward? I was always sane and I ought to know. I wanted sex, Edward, but I never got it and remember I was perfectly sane and perfectly normal but I never got what I wanted. I never mentioned it. I wasn't supposed to but I'm mentioning it now. ... I had such a capacity for love if I was given half a chance. That's all gone now, a thing of the past. There's nothing left to me. (108)

メイムは、“to be really loved in every sense physical” (109) と望むことは、自然な衝動であると気づく。しかしエドワードには、従順な妻・主婦であったメイムが突然乱費を望み、夫に性的関係を求めることが理解できない。妻は家庭にいて夫の制限下にあるべきであり、それは女性の伝統的な義務であると彼は考えている。ゆえに、妻が夫に“You have no right to impose restrictions on me.” (110) と主張することが、彼には「完全に正気で完全に普通」のこととは到底思えない。こうして、女性を男性と対等な存在と認めない夫エドワード

は、メイムの自立を阻む者となり、家はメイムにとって“a house where 'tis a sin to be human” (113) となってしまう。

**Mame** ... What difference now if I was a common whore or an adulteress, if I had neglected my children and my home. ... Suppose I had been like some of my neighbours, the one who was always screwing with the insurance agent or the poor oul' bitch who was forever tipping or the one who refused to cook her husband's meal or lie with him or have anything to do with him. (120)

メイムは夫に従順な「理想の女性」であり続けることに疲れたのではない。ゆえに「低俗な娼婦か浮気女にでもなって、子供たちや家の世話を放棄して……保険の外交員と始終体を重ねて」みたところで、メイムの孤独は解消されない。

メイムがムーアの求婚を断ったのは、それが唐突であったがゆえではない。ムーアは彼自身の孤独を癒す相手を欲しているだけであり、それはメイムの求める男女の平等な関係、夫婦の対等な関係、人間同士の関係ではなかったからである。

メイムに乱暴を働く娼婦とそのヒモの関係は、男女のある一つの固い結びつきに見えるかもしれない。しかし、男性が女性の保護者然としていて、女性が男性に従属・依存するという関係は、メイムの恐れる関係でしかない。

メイムを施設で療養させる相談がなされる場面（2幕2場）である。

**Kate** Let's be honest and get this over with ... . All of us are concerned for you, Mame, and we're more than worried for your health. (152)

**Kate** All right, Mame. I don't like beating about the bush and neither do you. We all know you're not well and that you haven't been for some time. You'll be the first to admit this yourself. We decided it was time we did something to help you. (153)

**Kate** Nothing positive but something like a rest-home might be just the thing. (153)

メイムは、「皆が心配している」というのは口先だけで、その真意は自分らの利益の追求、もしくは不利益の回避でしかないと理解している。「療養所」とは名ばかりで、実態はメイム曰く“A nuthouse” (153) であり、そこに皆が自分を隔離したがつっているとメイムは承知している。

メイムは、義母を思つてという装いのケイト（長男ジャックの妻）のおためごかしに偽善を感じ取り、ケイトを“a selfish bitch” (154) となじる。夫と二人の息子はケイトを侮辱したと、メイムに謝罪を求める。

このときメイムは、女性は妻となって家庭に入れば自己を没して生きるしかないということを、あらゆる母親は知っているはずだと気づく。母親は嫁いだ娘の先行きを体験的に予測できるのに、なぜいつの世代の母親も自身の娘にそれを警告しないのか、メイムはそう考え始める。

**Mame** ... I've been married twenty-five years. I was true to my husband and my two boys. I needn't have been but any other sort of behaviour would have been unthinkable for me. I never spent a penny foolishly. My home was always first and last with me. I never took a drink, maybe a sherry at Christmas or at a wedding. I smoke a very odd cigarette but I think that even my worst enemy would say that I'm entitled to that. I always kept the peace in my house and always gave in because it was the traditional thing to do. (156)

ついにメイムは、“I'm keeping the peace no more.” (156) と言って、女性の務めとされるものに自己を没する生き方に訣別する宣言をする。しかし、嫁のケイトも夫も息子たちも、メイムの心底にあるこの決意に気づくことはない。自立した個の存在を認められない限り、メイムの不安と孤独（疎外感）は解消されない。それを理解できないエドワードは、メイムを非難し続ける。

エドワードはゴルフクラブの会員となって名士の仲間入りができなかった原因が、“A lot of people think you're a prostitute.” (160) にあるとメイムを責める。そして世間体の悪いメイムの言動ゆえに、“I paid the biggest price of all.” (161) と嘆く。

この時エドワードは社会が受け入れない者の例として、“Like Jews. Like fellows who haven't gone to the right schools and men who have unreliable wives...” (162) と言って眉をひそめる。彼の言う素行不良の妻メイムは、人

種差別と同次元の被差別者とされ、ついには“shame” (163)、“criminal” (163)とまで断じられる。

メイムは自分が単なる一個人として尊重されないのは、女性が娘・妻・母・主婦以外の存在になれない慣習のせいであると強く意識する。

Children, obey your parents in all things: for this is well pleasing unto the Lord.  
(*Colossians* Chapter 3:20)

メイムの前には多くの母親たちがいた。しかし、女性は妻・母・主婦であらねばならないゆえに、独立した自我を持ち難いことについて、どの世代の母親も次の世代の女性に伝えてこなかった。女性は家庭の平和を守ることに専念し、「コロサイ人への手紙」にあるように、「あらゆることにおいて両親に従え」と教えられるだけであった。

家庭の天使はとても同情深いのです。とても魅力的です。自己中心的なところが少しもありません。家庭生活を営む上での難しい技に熟達しています。日々、自己犠牲をいといません。(略) 要するに、自分自身の意見とか願望を持たず、いつも他の人びとの意見や願望にそって考えようとする性質なのです<sup>2)</sup>。(ウルフ3)

Virginia Woolf (1882-1941) は、家庭内で妻や母の役割を果たす女性を、Coventry Patmore (1823-96) を引用して「家庭の天使」と言ったが、この女性像こそ女性を抑圧するものであるとメイムは気づいたのである。そしてメイムは「家庭の天使」という位置づけから外れた自分に苦悩する。自己を仮託できる「家庭の天使」像を失ったメイムは、自分が何者であるかという規定に揺れ、自分が誰でもない人間と思う。家庭が閉所の恐怖を覚える場となっていたメイムの孤独・疎外感の本質はここにある。

理想的女性像としての「家庭の天使」は、ヴィクトリア朝期の言説空間に突如登場する。この言葉が Coventry Patmore の *The Angel in the House* (1855-56) のタイトルから生まれ、当時の社会に流布したのは今では周知のことである。しかし彼は詩の中で「家庭の天使」の具体的な姿を述べてい

るわけではなかった。むしろこの *The Angel in the House* が世にでる前に理想的な女性像が絵画や詩、小説の中ですでにできあがっており、「家庭の天使」という命名があとになったといったほうが正確なのだろう<sup>3)</sup>。

(平林35)

「理想的な女性像」の歴史を積み重ねてきたその責任は、男性だけでなく、女性の側にもある。メイムはすべての母親に感じた女性・妻・母の生き方と同様になっている自分に気づきはしたが、夫にも息子らにも、嫁（義理の娘）らにも、「家庭の天使」は、女性に課せられた抑圧・枷であることを伝えないままに去ってしまう。

彼女（家庭の天使）はなかなか死にませんでした。（略）実在のものを殺すより、幻を殺す方がずっと難しいのです。最後の止めを刺したと思っても、彼女は決まってこっそりと舞い戻ってきました<sup>4)</sup>。 (ウルフ5)

家庭における役割・関係性が確認できないメイムは、それまでの人生も自分の存在も無と化す恐怖と孤独に脅える。自分の存在が認められないゆえの彼女の自己喪失感、女性であるがゆえに、そう感じざるを得ない社会の慣習のせいである。舞台はそれを伝える。

メイムと言う名前は、アラビア語の語源では「素晴らしき模範」<sup>5)</sup>を示し、キリスト教社会ではメアリーの別称ともされる。メイムは女性史上ずっと伝えられずにきたこと、すなわち女性の役割という不死の「幻」に気づいた人物なのである。

### ***Moll***

1971年7月1日、Killarneyで、The Theatre of the Southによって初演。改編された台本では、1991年6月10日、DublinのThe Gaiety Theatreで上演される。

1幕1場。Ballast教区内のある教会に付設された司祭館。勤続20年の家政婦が辞めたので、新しい女性を雇うことになり、助任司祭のFather BrestとFather Loranが、応募者の面接をしている。最後に面接を受けた女性



1971年のジョン・B・キーン作品の女性たち

Maureen Kettle（通称 Mollie、Moll、47歳）が新しい家政婦として採用される。

2場。1か月後の朝。プレストが Canon Pratt に、食事について不満を訴える——モルは主任司祭のプラットには豊富な量を大皿で用意するが、職位が下の司祭たちには小皿で供し、それは質量ともにきわめて貧しい——と。

モルは、教会の屋根の修繕費用などを捻出するためと称して、ビンゴ大会を開くことを提案する。プラットは承諾し、プレストをビンゴ大会の責任者に就ける。

2場。4か月後。モルの苛烈な扱いに恐れおののくプレストは、教区司祭への訴状を連名で出そうと、ロランに持ち掛ける。しかし、ロランはこれに同調しない。

ビンゴ大会の開催頻度が上げられ、運営を任されていたプレストの負担が一層増す。さらにプレストには、教区内の瀕死の信徒を訪問して看取る務めも課される。

4場。モルは結婚で訪れた人たちに、式を司る司祭への口利き料を要求する。

2幕1場。1年後。下位の司祭たちは痩せ衰えている。一方、教会はビンゴやくじの収益で潤い、建物の修繕・補修を済ませ、学校建設に着手する。

2場。4年後。繁栄した教会は教区司祭の覚えも良く、プラット主任司祭は大層ご満悦である。学校創設のお祝いを訪れた司教が、プラットの栄転と、プレストが代替りの主任司祭に昇進することを伝える。

笑いを誘う場面は終始続く。

家政婦の面接では Miss Andover が、プレストに連想する言葉を訊かれてこう答える（1幕1場）。

**Father Brest** It's not a physical test. I'll merely mention a particular word or group of words and you say whatever comes into your mind. Do you understand?

**Miss Andover** Allright, I'll chance it.

**Father Brest** Wardrobe!

**Miss Andover** Bottle of Gin!

**Father Brest** Sunday morning!

**Miss Andover** Gin and Tonic!

**Father Brest** Sacrisy!

**Miss Andover** Alter wine!

(10-11)

*The Change in Mame Fadden* のメイムのように、一般に女性は酒も煙草もめったに口にしないのが普通とされる時代に、司祭館の家政婦は共通して、アンドーヴァーのように “a cross between a wine-taster and a dipsomania” (12) とされる。モルはこの典型から外れ、アルコールを口にしない誠実な家政婦ということである。

Monsignor MacMerrigan の推薦文でも、モルは “a thrifty and exact housekeeper” (14) とされている。しかし、モルを家政婦に雇うことを決めた際、プレストだけは “a foreboding” (20) から、モルに “something hidden beneath that calm surface” (19) を感じ取り、“I happen to know that God’s greatest blessing is a good housekeeper but that God’s greatest curse is a bad one.” (22) と警戒する。

警戒は現実となり、2幕2場でプレストとロランは、うたた寝するモルを見て、“The devil incarnate” (87) と思い、悪魔祓いを試みようとする。

各場の前で、プラット主任司祭の日記が読まれる。

1幕1場の前の日記に、“After the new money came things were never the same at the presbytery.” (7) とあるように、1971年2月に通貨が十進法に移行して、*Moll* 初演時（1971年7月）の人びとの間では、金銭の話題がかまびすく交わされていたという<sup>6)</sup>。1ポンド = 20シリング = 240ペンスだったのが、1ポンド = 100ペンスとなって、人びとは貨幣価値が目減りしたような感覚に強くとらわれていたという。

モルの金銭感覚は、とりわけ強烈である。モルに信仰心に基づいた身の処し方は一切見られない。彼女の狡知に長けた儉約は、彼女の金銭欲と表裏一体で、随所に働かず守銭奴のごとき彼女の悪知恵は終始笑いを誘う。

舞台は一貫して教会と司祭らの俗物性を揶揄していくのだが、それはカトリック信仰における大きな罪源とされる七つの欲望（傲慢、嫉妬、憤怒、怠惰、強欲、暴食、色欲）と結びついている。

プレストの食事への不満は、嫉妬や暴食という罪源を露にする。

プレストが、プラットに食事の皿の交換を申し出て、プラットが同意する場

面がある（2幕1場）。ところが、モルの持ってきた皿はすでに厨房で交換されていて、大きな林檎パイはプレストの小さい皿に載っている。大きなパイを食すのはやはりプラットとなり、思惑の外れたプレストは嫉妬と憤怒を募らせる。

**Father Brest** I believe you but before I close let me add that I could not chew the meat of that chop yesterday. I tried and failed. I hacked at it and I tore at it but I made no impression. I can only conclude that the same chop which I euphemistically called mutton was not mutton at all. (Goes furiously towards exit where he stands) I can only conclude that it was hacked, gartered and hewn from the posterior of a mountain ram who was siring ewes when Holy Saint Patrick was a boy in the mountains of Antrim. (33-34)

プレストたち下位の司祭らに供される噛み切れない古くて硬い肉の小片は、奴隷としてアイルランドに連れてこられた少年（後の聖パトリック、389？ -？ 461）が羊飼であった時代の物と形容される。一方、プラット主任司祭の皿には、大量の豆と子羊の骨付肉が盛り付けられている。

モルは、年長で格上の司祭と若い司祭らに差があるのは当然であると言う。主任司祭に豪華な食物を供するのは、年長の上級職位者への敬意とモルに言われて、プラットの傲慢は大いにくすぐられる。

モルはさらに、女性と逃走した若い司祭を引き合いに、プレストらの質素な食事は、儉約の徳を実践し、若者の暴食を防ぎ、若い司祭たちの精力に溢れての色欲を抑制すると言う。飽食は愚行と怠惰を生み、自制心を失わせるという戒めは、年長者たる主任司祭プラットには適用されない。

**Cano Pratt** A word about the bingo. Bingo is no sin. There are some who will tell you that bingo is gambling and that therefore bingo is a pernicious evil preying upon the vulnerability of simple people. Yirra, bingo is not gambling at all but a harmless bit o'fun. ... there is every encouragement to reinvest in the parish funds for the glorification of God and the salvation of the donor's soul.

(52)

モルは、雨漏りのする教会で高齢者の信徒が風邪をひいて肺炎を起こしてはいけない、そうした深慮から修繕費を調達するという目的で、ビンゴ大会を提案する。モルの論理に進んで説得されるプラットの心底に潜むのは強欲である。プラットは「神の栄光と献金者の魂の救済のため」と日記に記して、信徒らから儲けることについての良心の呵責を抹消する。

金を稼ぐことに抜け目がないモルは、教会での挙式料を定める。

失業中の女性が安定した生活を得る目的で、年の離れた男性との結婚を図り、それを認めてもらうべく教会を訪れる場面がある（1幕4場）。モルは、夫となる男性の財産を、牝牛1頭につき2ポンドから豚1匹につき1シリングというふうに慣例に基づいて所有する家畜に換算する。そしてそれによって挙式料を決める<sup>7)</sup>。結婚を急ぐ事情のある人には、その弱みに付け込んで、司祭への取次料をせしめて、自分の懐に入れる。

モルの最大の被害者を自認する prest は、モルが以前に勤めていた司祭館の若い助任司祭が“a mixture of maleficence, malnutrition and pernicious anemia”（45）により病死したことを知る。prest は恐怖と憤怒を募らせ、ついにはプラットの上位にある教区司祭に、モルの仕打ちを訴えようとする。しかし、事は首尾よく運ばない。

モルが司祭館を辞すると申し出る。その理由は、いずれ遺産と遺族年金を得られるように、誰か老人と結婚するためと言う。モルが老後の生活への不安から、プラットに年金をいただきたいと申し出たことには（現代社会からみても）同情の余地があろう。

プラットが引き留めると、モルは老後の保障として彼女独自の年金を彼に約束させる。その方法は、毎日曜のミサの後の献金を、信徒らに従来よりも多く出させる、ミサカードの署名を助任司祭たちからプラット主任司祭に限定して謝礼額を上げる、その一部を自分の年金の財源に充てる、というものである。こうしたモルの一連の錬金術に、たいがいの観客は舌を巻くであろう。

モルは司祭館にとどまることになり、プラットは、カードに署名するだけで懐に入る金額が増すというこの策に喜ぶ。

下位の司祭よりも上位の司祭の署名の方を信徒はありがたいというモルの着眼は、プラットの虚栄心とともに、司祭の序列を気にする人びとの俗物性をも表している。

聖職にある者は清貧と節制を貫き、徳を積むことを旨とする、と一般には期

待されているのであろうが、実態が乖離しているその様子は舞台上でさらに露呈され続ける。

金儲けの口口が葬儀と供養の祭事に及んでも、プラット主任司祭がモルの弄する策略を否定することはない。それを悪徳と断じる知性や倫理感が示されることは全くない。

モルが前職を解雇されたのは、教区司祭が妻帯者となって家事一般をする者が不要となったからである。妻は家事の専従者という時代であったが、新しい学校創設のお祝いに訪ねて来た司教が辞去する際に、“I must go to suppress a Women’s Lib movement.” (97) と言うように、1970年代の初めのアイルランドでは、様々な公民権運動とともに、女性が男性と対等であるということが盛んに唱え始められていた。

人は誕生すると教会で洗礼を受け神の子となり、「堅信」により自らの信仰をより堅固にする。日々の礼拝に参列し、御聖体をいただき、神の御言葉の伝達者である司祭の言葉に導かれ、神が所望される生活を営む。日々の行いを省み、どのような些細なことであっても、罪との認識があるのであれば、それを司祭に「告白」し、悔い改め、赦しを請う。その後、司祭を介して「恩寵」をいただき、神の子として生まれ変わる。婚姻に当たっては司祭から祝福を受けて、死の際には司祭から「終油」をいただき、神の世界へと導きを得る。このように当時のアイルランドでは人が生を受けた時から死に至るまで、教会や司祭の介在なしに生活を営むことは事実上不可能な仕組みが作られていた<sup>8)</sup>。(金田13)

We are an unfortunate priest-ridden race and always were and always will be till the end of the chapter. (Joyce 35)<sup>9)</sup>

キーンは*Big Maggie*でも*The Change in Mame Fadden*でも、ウルフのいう「家庭の天使」像に反する女性を描いて、既成概念の圧力の根強さを描いてきたのだが、*Moll*では、教会と司祭館を舞台に、人間の打算や利己主義、それを糊塗する偽善を暴き出している。

権威者である教会と聖職者をモルが翻弄するところに溜飲が下がると言う劇評がある。また、女性のモルが男性たちを操る、それが特に女性には痛快と指

摘する劇評もある。しかし *Moll* に読み解くべきは、「教会や司祭の介在なしに生活を営むことは事実上不可能な仕組み」の中であって「のさばる坊主に支配されている不幸な民族」<sup>10)</sup> を嘆き、教会と司祭を批判することではない。

**Canon Pratt** If there is a sound that pleases me more than most 'tis the sound of laughter. Laughter erupts from the soul in an irrepressible declamation of an excess of good humor. Laughter is natural, you see. 'Tis one of the many magical gifts the good Lord provides. (41)

権威ある者には追従の姿勢を見せておき、そつなく自己の利益を得るというモルの卑しさと、それに乗じる聖職者の欺瞞と偽善は、この舞台上だけのことではないであろう。

ブラットは最後に転任して上級職に就くことになるが、モルのいない教会で厳格な修道女と過ごすことを想って落胆する。

主任司祭という権威者に新たになるブレストは、モルを悪魔とののしっていたが、モルが用意する自分のスープが、助任司祭のままのロランの倍の量となっていることに、自分が吸える（文字通りの）甘い汁を想い、悦に入る。

モルに手玉に取られた聖職者が、浅ましい様子を見せる。観客は、そうした権威者の自己中心的であり偽善者である姿を、あざ笑う。

金銭に貪欲で自分の利益・不利益に狡猾に打算を働かせるのは、単に信仰心や倫理観の欠如ということを超えて、多くの人間が誰しも大なり小なり持っている性格・性質の一端と言えよう。その愚かさや偽善を内に潜めている者は、「善なる主からの素晴らしき贈り物の一つである」笑いを受け取る観客となっているつもりでいて、実は滑稽にも自らを嗤っていることになる。

## 註

テキストは以下を使用。邦訳は特に注記のない場合は筆者によるものである。

Kean, John B. *Three Plays*. Cork, The Mercier Press, 2001.

————— *Moll*. Cork, The Mercier Press, 1991.

1971年のジョン・B・キーン作品の女性たち

- 1) 拙文「1960年代後半のジョン・B・キーン作品を読む」『獨協大学英語研究』第80号、獨協大学、2019。
- 2) 平林美都子「十九世紀英国小説における「家庭の天使」の言説とその不在」『愛知淑徳短期大学研究紀要』第36号、愛知淑徳短期大学、1997。
- 3) ヴァージニア・ウルフ『女性にとっての職業』出淵敬子、川本静子監訳、みすず書房、1994。
- 4) Ibid.
- 5) <https://www.names.org/n/mame/about> (Accessed Sept. 1, 2020)
- 6) 1971年2月に通貨が十進法に移行。2シリングが10ペンスに、6ペンス硬貨、3ペンス硬貨、半クラウン硬貨が廃止される。新1ペニーは旧2ペンス。1ポンド=12シリング=240ペンスは、100ペンスとされる。
- 7) 資産価値を、所有する家畜に換算するのは、「……牧畜を基盤とする古代アイルランド社会では、価値評価の単位には、実際には主として乳牛が用いられていた……貨幣も……金貨一枚は乳牛一頭（二シェード）、銀貨一枚は……乳牛の値の二四分の一とされた」とあるように、古くからの慣習であった。ピーター・トレメイン『蛇、もっとも禍し（上）』甲斐萬里江訳、創元推理文庫、2009、p.326。
- 8) 金田法子『ジョイスの戦争』中央公論事業出版、2015。
- 9) Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man*. London, Grafton. 1976.
- 10) われわれはのさばる坊主に支配されている不幸な民族なんだ、これまでずっとそうだったし、これからさきはいついつまでもそうだろう。ジェームズ・ジョイス『若い芸術家の肖像』大澤正佳訳、岩波文庫、2007、p.70。